

紙川文書
107

學制第百貳十五号

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35

第二百四十四

人々自ら其身を立て其産を治め其業
を昌よして以て其生遂る由あるの
もの他あり身を脩め智を開き才藝
を長むはよふあり而て其身を脩め
智を開き才藝を長むるは學よらうと
れ能くは是れ學校の設け方由ある

よして日用常行言語書算を初め士官
農商百工技藝及び法律政治天文醫藥
等に至る凡人の營むところの事學
らうと欲ふ一人能く其才のあはと
ころは應に勉勵して之に従事しそ
して後初めて生を治め産を興し業を昌
はせり我得一しこれハ學問ハ身を立

家の財本ともいふべきものにして人
たるもの誰り學を以て可あらんや
夫の道路は迷ひ飢餓は陷り家を破り
身を喪の徒の如きは畢竟不學より
てかゝる過ちを生ずはより從來學校
の設けりてより年を歴るゑ久し
いへとも或ハ其道を得ざるよりして

人其方向ちあてを誤あやまり學問がくもんの士人しにん以上の事
と農工商及び婦女子ふむすこに至いたつて之
を度外とくがいよなき學問がくもんの何物なんものたる殘弊ぜんぺいを
以もつ又士人以上しにんいじょうの稀まれは學問がくもんの動うごも
それハ國家こくかの爲ために吟と身みを立たる
の基もとたるを知らして或あるハ詞章ししやう記誦きじゆの
末すえは趨きり空理くうり虛談きょたんの途みちに陷おちり其論そのろん高たか

尚たうは似にたりといひて之これを身みは行なひ
事ことは施ほくもあらず能あたらざるもの少すくうは是
をふはち治ち襲しうの習しう弊へいにて文明ぶんめい普ふ法はふ
うは才さい藝ぎの長ちやうせいで貧びん乏はく破は産さん喪さう
家の徒と多たき由よしあるあり是故ゆゑ又人た
もの學がくはせんはあはれに之を
學がくふは宜よろしく其旨そのしるしを誤あやるゝらん

之は依て今般文部省に於て學制を定
め追々教則をも改正し布告し及ふ
まにづき自今以後一般の人民華士族平
婦女必は邑に不學の戸あり家は不學
の人あり一先事を期せ人の父兄
たふもの宜しく此意を體認し其愛育
の情を厚く其子弟をして必は學ぶ

從事せしめさへいふものあり
高上の學に至る其人の材能は任
けといはれども幼童の子弟は男女の別
なく小學は從事せしめさるべき事
其父兄の越度たるべき事
但從來沿襲の學問は士人以上の
事として國家の爲にせし唱ふるを以
て學費及其衣食の用に至は迄多く
官に依頼し之を給ふるに非されハ

學まなぶ事ことと思ひ一生を自棄おぼろにすも
の少すくうは是皆惑まどへるの甚しきも
のあり自今以後此等の弊ひを改あらため一
般はんの人民他事を抛あきらめ自ら奮ふるて必かならずに
學まなぶ事ことに従したがふこと様心得しやうこころへき事
右之通被仰出候條地方官に於テ邊
隅小民に至いたる迄不洩様便宜解譯かいやく加

へ精細申論文部省規則に隨したがひ學問普
及致候様方法ヲ設可施行事

明治五年壬申七月

太政官

令般被 仰出候旨モ有之教育之儀ハ
自今尚又厚ク御手入可有之候處從來
府縣ニ於テ取設候學校一途ノラス加
之其内不都合之儀モ不少依テ一旦悉
令廢止令般定メラルタル學制ニ循ヒ
其主意ヲ汲ミ更ニ學校設立可致候事

但外國教師雇入有之場所ハ當省ヨ
リ官員ヲ派出シ地方官協議之上可
及蒙分候條夫迄之蒙生徒教授向等
不都合無之樣可取計尤當省出張ヲ
不待學制之目的ニ依リ成丈相運候
樣可致事

壬申七月

文部省

學制

大中小學區ノ事

第一章 全國ノ學政ハ之ヲ文部一省ニ統フ

第二章 全國ヲ大分レテ八大區トス之ヲ大學

區ト稱シ每區大學校一所ヲ置ク

第三章 大學區ノ分別左ノ如シ

第一大區

東京府

神奈川縣

埼玉縣

入間縣

水更津縣

足柄縣

印旛縣

新治縣

茨城縣

群馬縣

朽木縣

宇都宮縣

山梨縣

静岡縣

計一府十三縣東京府ヲ以テ大學本部ト

第二大區

愛知縣

濱松縣

度會縣

岐阜縣

三重縣

第三大區

計五縣愛知縣ヲ以テ大學本部トス

石川縣

筑摩縣

新川縣

足羽縣

敦賀縣

計五縣石川縣ヲ以テ大學本部トス

第四大區

大坂府

京都府

兵庫縣

奈良縣

堺縣

和歌山縣

飾磨縣

豐岡縣

高知縣

名東縣

香川縣

岡山縣

滋賀縣

計二府十一縣大坂府ヲ以テ大學本部ト

第五大區

廣島縣

鳥取縣

島根縣

北條縣

小田縣

石鐵縣

神山縣

山口縣

濱田縣

計九縣廣島縣ヲ以テ大學本部トス

第六大區

長崎縣

佐賀縣

八代縣

白川縣

美津縣

都城縣

鹿兒島縣

小倉縣

大分縣

福岡縣

三潯縣

計十一縣長崎縣ヲ以テ大學本部トス

第七大區

新潟縣

柏崎縣

置賜縣

酒田縣

若松縣

長野縣

相川縣

計七縣新潟縣ヲ以テ大學本部トス

第八大區

青森縣

福島縣

磐前縣

水澤縣

岩手縣

秋田縣

山形縣

宮城縣

計八縣青森縣ヲ以テ大學本部トス

總計三府六十九縣

第四章 北海道ハ當分第八大區ヨリ之ヲ管ス
他日別ニ區分スヘシ

第五章 一大學區ヲ分テ三十二中區トシ之ヲ
中學區ト稱ス區毎ニ中學校一所ヲ置ク全國
八大區ニテ其數二百五十六所トス

第六章 一中學區ヲ分テ二百十小區トシ之ヲ
小學區ト稱ス區毎ニ小學校一所ヲ置ク一大

區ニテ其數六千七百二十所全國ニテ五萬三
千七百六十所トス

第七章 中學區以下ノ區分ハ地方官其土地ノ
廣狹人口ノ疎密ヲ計リ便宜ヲ以テ郡區村市
等ニヨリ之ヲ區分スヘシ

第八章 一中區内學區取締十名乃至十二三名
ヲ置キ一名ニ小學區二十或ハ三十ヲ分テ持
タレムヘシ此學區取締ハ專ラ區内人民ヲ勸
誘シテ務テ學ニ就カシメ且學校ヲ設立シ或

ハ學校ヲ保護スヘキノ事或ハ其費用ノ使用
ヲ計ル等一切其受持所ノ小學區内ノ學務ニ
關スル事ヲ擔任シ又一中區内ニ關スル事ハ
互ニ相論議シ專ラ便宜ヲ計リ區内ノ學事ヲ
進歩ヒレモノシテ務ムヘシ

第九章 學區取締ハ地方官ニ於テ之ヲ命スヘシ

但其人名ハ本省督學局ニ届クハ督學局
第五章ニ見ユ

第十章 學區取締ハ其土地ノ居民名望アル者

ヲ撰ムヘシ

但戸長里正等ヲレテ兼シシムハ妨
シトス

第十一章 學區取締給料ハ當分其土地ノ情態

ニヨリテ之ヲ定ムハ此給料ハ土地ヨリ出
スヘキモノトス然レ事實止ヲ得サルモノハ
姑ク官ヨリ其幾分ヲ助給スヘシ

第十二章 一般人民華士族卒農工商及婦女ノ學ニ就クモ

ハ之ヲ學區取締ニ屆クハレ若レ子弟六歳
以上ニ至リテ學ニ就カシメサルモノアリハ
委シク其由ヲ學區取締ニ屆ケレムヘシ私塾
家塾
ニ入リ及ヒ已ムヲ得サル事アリテ師ヲ其家
ニ招キ稽古セシムルモ皆就學ト云フハレ
第十三章 學區取締、毎年二月區内人民子弟
六歳以上ナルモノ、前年學ニ就キ、幾人學
ニ就カリタルモノ幾人ト第一號、式ノ如ク表
ヲ作リ之ヲ地方官ニ出シ、地方官之ヲ集メテ
四月中督學局ニ出スハ、

第十四章 官立私立ノ學校及私塾家塾ヲ論セ
ス其學校限リ定ムル所ノ規則及生徒ノ増減
進否等ヲ書記レ毎年四月之ヲ督學局ニ出ス
ヘシ
但官立大中學校ニテハ其書記ヲ三紙トシ
一紙ハ督學ニ出シ一紙ハ地方官ニ渡シ一
紙ハ學區取締ニ下タスヲ法トス
官立ノ小學及ヒ私學私塾家塾等ニテモ三

紙ニ書記レ之ヲ學區取締ニ出、學區取締
ヨリ地方官ニ出、地方官之ヲ集メテ四月
中督學局ニ出スヘシ其一紙ハ學區取締ニ
留置キ一紙ハ地方官ニ留ムルヲ法トス

第十五章 大學本部毎ニ督學局一所ヲ設ケ督
學ヲ置キ附屬官員數名之ニ充テ本省ノ意向
ヲ奉レ地方官ト協議シ大區中ノ諸學校ヲ督
レ及教則ノ得失生徒ノ進否等ヲ檢査シ論議

改正ムルヲアルヘシ

但大事ハ決テ本省ニ取リ小事ハ直ニ之ノ
處分シ毎年二月八月本省ニ開申スヘシ

第十六章 督學局ニ於テハ毎年學區取締ヨリ
出ス所ノ表并ニ諸學校ヨリ出ス所ノ書記ト
ヲ以テ學校及生徒進歩ノ狀態并ニ六歲以上
ノ男女學ニ就ケモノ幾人就カサルモノ幾人
等ノ表ヲ製シ本省ニ送リ本省ニ之ヲ上梓
公告スヘシ

第十七章 督學局ハ總テ地方官ト協議スヘレ
トイヘヒ直ニ學區取締ヲ呼出レ本局ノ意向
ヲ諭示スルヲヘレ

第十八章 地方官ハ總テ督學局ニ協議スヘレ
但督學局完全ナラサルノ間ハ總テ本省ニ
申出ツヘレ

第十九章 地方官ニ於テハ學務專任ノ吏員一
二名ヲ置キ部内ノ學事ヲ擔任セシムヘレ其
人名ハ兼テ本省并ニ督學局ニ届ケ置クヘレ

○學校ノ事

第二十章 學校ハ三等ニ區別ス大學中學小學
ナリ學校教則書
別冊アリ

○小學

第二十一章 小學校ハ教育ノ初級ニシテ人民
一般必ス學ハスニハアヘカラサレモト
ス之ヲ區分スレバ左ノ數種ニ別ツヘシ然レ
均ク之ヲ小學ト稱ス即チ尋常小學女兒小學村落小學
貧人小學小學私塾幼稚小學ナリ其外廢人學校アルヘシ

第二十二章 幼稚園小學ハ男女ノ子弟六歳迄ノ

モノ小學ニ入ル前ノ端緒ヲ教ハナリ

第二十三章 小學私塾ハ小學教科ノ免狀アル

モノ私宅ニ於テ教ハナ稱スヘシ

第二十四章 貧人小學ハ貧人子弟ノ自活ニ難

キモノヲ入學セシメ、爲ニ設ク其費用或ハ富

者ノ寄進金等ヲ以テス是專ニ仁惠ノ心ヨリ組

立ルモノナリ仍テ仁惠學校トモ稱スヘシ

第二十五章 村落小學ハ僻遠ノ村落農民ノ

アリテ教化素ヨリ開ケサルノ地ニ於テ其教

則テ少レク省略シテ教ルモノナリ或ハ年已

ニ成長スルモノモ其生業ノ暇来リテ學ハレ

ハ是等ハ多ク夜學校アルヘシ

第二十六章 女兒小學ハ尋常小學教科ノ外ニ

女子ノ手藝ヲ教フ

第二十七章 尋常小學ヲ分テ上下二等トス此

二等ハ男女共必ス卒業スルキモノトス別冊

リ

下等小學教科

- 一 綴字 讀并盤上習字
- 二 習字 字形ヲ主トス
- 三 單語 讀
- 四 會話 讀
- 五 讀本 解意
- 六 脩身 解意
- 七 國體 解意
- 八 書讀 解意并盤上習字
- 九 文法 解意

十

算術

九九數付加減乘除但洋法ヲ用フ

十一

養生法

講義

十二

地學大意

十三

窮理學大意

十四

體操

十五

唱歌

當分々々々

上等小學ノ教科ハ下等小學教科ノ上ニ左
ノ條件ヲ加フ

一

史學大意

二

幾何學大意

- 三 野畫大意
- 四 博物學大意
- 五 化學大意
- 六 生理學大意
- 其地、形情ニ因テハ學科ヲ擴張スル為メ
- 左ノ四科ヲ斟酌シテ教ムルアルヘシ
- 一 外國語學ノ一二
- 二 記簿法
- 三 圖畫
- 四 政體大意

下等小學、六歳ヨリ九歳マデ上等小學ハ
十歳ヨリ十三歳マデニ卒業セシムルハ
則チ但事情ニヨリ一概ニ行ハレリ。特
ハ斟酌スルニ妨アリシトス

第二十八章 右ノ教科順序ヲ踏ムルニテ小學
ノ科ヲ授ルヒノ之ヲ變則小學ト云フ
但私宅ニ於テ之ヲ教ムモノハ之ヲ家塾ト
ス

(一) 中學

第二十九章 中學ハ小學ノ經タル生徒ニ普通

ノ學科ヲ教ル所アリ分テ上下二等トス二等

外ニ業學校商業學校通辦學校農業學校諸

民學校アリ

下等中學教科

國語學

算術

習字

社會學

五 史學

六 外國語學

七 窮理學

八 圖畫

九 古言學

十 幾何學

十一 代數學

十二 記簿法

十三 博物學

十四 化學

十五 脩身學

- 十六 生理學
十七 國體學
十八 政體大意
十九 國勢學大意
二十 奏樂當分缺
一 上等中學教科
二 國語學
三 習字
四 外國語學
五 窮理學
六 算畫
古言學

- 七 幾何學
八 代數學
九 記簿法
十 化學
十一 脩身學
十二 測量學
十三 經濟學
十四 車學大意
十五 動物學
十六 植物學
十七 地質學

十八 礦山學

十九 性理學大意

二十 星學大意

下等中學ハ十四歳ヨリ十六歳マテ上等中學ハ十七歳ヨリ十九歳マテニ卒業セムルヲ法則トス

第三十章 當今中學ノ書器未タ備ラス此際在來ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモ、或ハ學業ノ順序ヲ蹈マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ醫術ヲ教ルモ、通シテ變則中學ト稱スヘミ
但私宅ニ於テ教ルモ、ハ之ヲ家塾トス

第三十一章 當今外國人ヲ以テ教師トスル學校ニ於テハ大學教科ニ非リル以下ハ通シテ之ヲ中學ト稱ス

第三十二章 私宅ニアリテ中學ノ教科ヲ教ルモ、教師タルヘキ證書ヲ得ルモ、ハ中學私塾ト稱スヘキ其免狀ナキモ、ハ之ヲ家塾トス

第三十三章 諸民學校ハ男子一八歳女子十五歳以上ノモノニ生業ノ間學業ヲ授ケ又十二

歳ヨリ十七歳ヲテノ者、生業ヲ導カンカ為
メ專ラ其業ヲ授ケ故ニ多ク夜分ノ稽古アラ
シムヘシ

第三十四章 農業學校ハ小學ヲ經テ農業ヲ治
メントスルモノ、為ニ設ク

第三十五章 通辨學校ハ專ラ通辨ノ事ヲ主ト
ス戒ハ商人等交易ノ為メ專ラ通辨ノ事ヲ志
スモノ此校ニ入ル

但外國教師アリト雖モ只語學、レヲ教ル

者ハ之ノ通辨學校ト稱ス

第三十六章 商業學校ハ商用ニ係ルモノヲ教メ
海内繁盛ノ地ニ就テ數所ヲ設ク

第三十七章 工業學校ハ諸工術ノ事ヲ教メ

○大學

第三十八章 大學ハ高尚ノ諸學ヲ教ム專門科
ノ學校ナリ其學科大畧左ノ如シ

理學 文學 法學

醫學

第三十九章 小學校ノ外師範學校アリ此校ハ

アリテハ小學ニ教ル所ノ教則及其教授ノ方法ヲ教授ス當令ニ在リテ極メテ要急ナルモノトス此校成就スルニ非サレハ小學ト雖ル完備ナルヲ能ハス故ニ急ニ此校ヲ開キ其成就ノ上小學教師タル人ヲ四方ニ派出スルヲ期ス

○教員ノ事

第四十章 小學教員ハ男々ヲ論ヒス年齡二十

歳以上ニシテ師範學校卒業免狀或ハ中學免狀ヲ得シモノニ非サレハ其任ニ當ルヲ許サス

第四十一章 中學校教員ハ年齡二十五歳以上ニシテ大學免狀ヲ得シモノニ非サレハ其任ニ當ルヲ許サス

第四十二章 大學校教員ハ學士ノ稱ヲ得シモノニ非サレハ許サス
以上三章ハ其目的ヲ示ス數年ノ後ヲ待テ

之ヲ行ハ、後章ハ現今ハ位ニ應ニ對シ
ヲ許スモノトハ

第四十三章 私學私塾及家塾ヲ開カント欲ハ
ル者ハ其屬籍住所事歴及學校ノ位置教則率
ヲ詳記シ學區取締ニ出シ地方官ヲ經テ督學
局ニ出ス、
但家塾ハ地方官ニテ之ヲ聞届毎年二月
八月取集メテ督學局ニ出スヲ法トス

第四十四章 私學私塾教員タルモノ總テ規則
ニ違ヒ或ハ不行狀タル時ハ之ヲ譴責シ又ハ
之ヲ止メシムルハ之ヲ法トス

第四十五章 師範學校ニ於テ教授ヲ受ケタル
教員ハ他ノ職務ヲ兼テ及他ニ轉スハカヲサ
ルヲ法トス

第四十六章 小學教員ハ男女ノ差別ナレ其才
ニヨリ之ヲ用フヘレ

第四十七章 教員生徒ヲ教授スルノ功他ニ秀
越スルモノアル時ハ公私學校私塾ヲ問ハス
督學局地方官ト協議シ之ヲ本省ニ乞フ之ニ
褒賞ヲ與フ

生徒及試業ノ事

第四十八章 生徒ハ諸學科ニ於テ必ス其等級ヲ蹈ケルモノヲ要ス故ニ一級毎ニ必ス試験アリ一級卒業スル者ハ試験狀ヲ渡シ試験狀ヲ得ルモノニ非ヤレハ進級スルヲ得ス

第四十九章 生徒學等ヲ終ル時ハ大試験アリ

小学ヨリ中学ニ移リ中学ヨリ大学ニ進ム等ノ類

但大試験ノ時ハ學事關係ノ人實ハ勿論其請求ニヨリテハ親族或ハ他官員トイハレ臨席スル

一アルヘレ

第五十章 私學私塾生徒モ其義前二章ニ同レ

第五十一章 試験ノ時生徒優等ノモノニハ優賞ヲ與フルアルヘレ

第五十二章 生徒ノ學業銳敏後來大成スルキノ目的アルニ學資ヲ納ムル能ハス及其衣食ヲ給スルヲ能ハサルモノハ費用ヲ給貸スルアルヘレ但成業ノ後半割ヲ以テ之ヲ償フトモ或ハ官ニ奉事シテ使役ヲ受ルトモ命

ニ隨フヘキノ證書ヲ出サレノ年限ヲ定メ其
費用ヲ貸與ス是ヲ三等ニ分ク年割ヲ以テ償
業ヲ離テ五年ノ後ヨリスヘ
病死等アルハ之ヲ棄テ

公費ヲ受ル三年ノ者

同三年ノ者

同五年ノ者

此生徒八大區ニ平分シテ全國千五百人ト
限ル故ニ缺員アルニ非シレハ増加スルヲ
得ル

二年公費ヲ受クル者ハ官ニ使役スルヲ四
年償還スルハ六年ヲ以テス

三年ノ者ハ使役七年償還九年

五年ノ者ハ使役十一年償還十五年

此生徒一人ノ費用一年百二十兩一切官ニ

於テ之ヲ賄フ

別ニ其學校定ムル所ノ下等受業料、借ルモノ
トス故ニ之ヲ加ヘテ其ニ償還スルノ金高トス

但使役ノ間ハ相當ノ歲俸ヲ給スルハ勿論

タルヘシ若其役ヲ奉ヒサルモノハ前ノ官
費ヲ償フヘシ

第五十三章 私學私塾生徒モ其義前章ニ同レ
第五十四章 生徒ニ費用ヲ給貸スルハ其父
兄及本人ヨリ證書ヲ出サシメ且其修業シタ
ル學科ノ證書ヲ出サシム檢査法及證書式
等ハ別冊アリ
第五十五章 生徒ニ費用ヲ給貸スルハ其學
業ヲ授ケル教師ヨリ其生徒學業銳敏後來大
ニ成ルハキノ目的アルノ狀并ニ其曾テ進級
セシ處ノ學科ノ證書ヲ具ヘ幾年ノ公費ヲ給
スベキ云々等教師見込ノ詳記シ之ヲ督學局

ニ達スハ其學長アル學校ニ在リハ學長
其見込ヲ添ヘ之ヲ達スヘレ督學
局之ヲ地方官ニ議シ其貧困ノ狀ヲ詳ニシ而
シテ後其學業ヲ檢査シ本省ヘ申達スヘレ
但此生徒ハ公私大中小學ニ拘ハラズ且檢
査ハ地方官學務掛立會ヲ以テ法トスヘレ
第五十六章 師範學校ノ生徒ハ第五十二章ニ
定ムル所ノ生徒負數ノ内ナリ之ヲ採ルハレ
但當令設クル所ノ師範學校ノ生徒ハ此限
ニアラス

第五十七章 第五十二章ニ定ムル所ノ生徒ノ
外ニ公撰生ヲ設ク此ノ公撰生ハ他

海外留學生規則ノ事

第五十八章 海外留學生徒ハ都々本省ニ於
之ヲ管轄ス

第五十九章 留學免狀ハ本省ニ於テ渡
但渡海免狀ハ外務省ヨリ受取リ相渡スヘ

第六十章 留學中諸般ノ事件ハ公使ヘ依頼

其指令ニ從ノヘレ且生徒ノ中人撰ノ上生
徒總代ノ者一人或ハ幾人公使ヨリ申付ヘ

第六十一章 留學ニ官撰ト私願トノ別ノ官
私共都々本省ニ於テ之ヲ達スヘ

第六十二章 官撰留學生ヲ撰ハニ等ノ差
リ一ヲ初等留學生トシ一ヲ上等留學生トス
第六十三章 初等留學生ハ中學卒業ノモノヨ
リ撰ム上等留學生ハ大學ノ學科卒業ノモノ

ニリ撰ハ

第六十四章 初等留學生ハ稟性誠實達敏ニシテ十九歳以上二十五歳迄ノ者小學初級ヨリ順次進級シ中學ノ課程ヲ卒業シ證書ヲモノラ公ニ撰舉スヘシ

但國內大學校ニ入リテ研業ヒ、一ヲ願フ者ハ撰ニ當ル人トイヘル其情願ニ任スヘシ

第六十五章 初等留學生ヲ撰ハニハ其學業ヲ

授ケレ教師ヨリ生徒中學卒業試験ノ證書ヲ具ヘ其撰舉見込ノ詳記シ之ヲ督學局ニ達ス督學局之ヲ検査シ甲第ノモノハ即チ其試験ノ始末ヲ詳記シ本省ニ出シ其允可ヲ得ルヲ法トス

但検査ノ時ハ本省官員ハ勿論其請求ニヨリテハ親族或ハ他官員タリトモ臨席スルヲアルヘシ

第六十六章 官撰留學生ハ第六十四章第六十

五章ニ定ル所ノ規則ニ隨ヒ其進級ノ順序確
實ニシテ後來成業ノ目的アルニ於テハ生徒
公私ノ差別アルヲシ

第六十七章 官撰留學生ノ學科ハ官ヨリ命ス
ヘント雖モ當人ノ望ミト其教師ノ見込トニ
ヨルアルヘシ故ニ當人ノ望ミ某ノ科ヲ修
業スルニアルハ教師ノ思考果シテ適當スル
ヤ否ヲ詳記シ試験ノ節教師ヨリ之ヲ出スヲ
法トス

但此記載ハ兩紙ヲ出スハレ一紙ハ之ヲ本
省ニ留メ一紙ハ之ヲ公使館ニ遣ハス

第六十八章 官撰留學生外國へ着セハ某地ニ
アリテ某ノ學校ニ入り某ノ人ニ從テ某科ヲ
學ノ等ノ事ヲ詳記シ本省へ届クヘシ

但シ八ヶ月ヲ越テ其報ナキ時ハ即公使
ニ掛合ヒ呼戻スヘシ

第六十九章 官撰留學生ハ外國ニアリテ學科
進級ノ時ハ必ス本省ニ届クヘシ

第七十章 官撰留學生歸 朝ノ時ハ其外國ニ

アリテ研業セシ所ノ狀ヲ具シ本省ヘ出入ヘ
シ本省ニ於テ之ヲ試験スルヲ法トス

但外國ニ於テ大學卒業ノ免狀アルモノハ
試験ニ及ハス

第七十一章 大學校ニ於テ專門ノ學科ヲ卒業

セシモノハ官撰ヲ以テ順次ハ順次トハ大學科卒業ノ
モノ幾人アルハ教師試験ヲナシ其内甲第ノ
常一ノ人若クハ二人ヲ採リテ上等生ノ海
外ハ一年ヲ經テ前ノ如ク撰擢スルヲ云ク

ニ派出シ其業ヲシテ一層精密鍊熟セシム是

ヲ上等留學生トス

第七十二章 初等留學生ハ通常年限滿五年ニ
過クヘカラス

第七十三章 上等留學生ハ通常年限滿三年ト
スヘシ

第七十四章 初等留學生ハ定員百五十人ト定

第七十五章 上等留學生ハ定員十二人ト定

多キモ三十人ニ過クヘカラス

第七十六章 大學設置ノ日ニ當ツテ中等留學生ヲ設クルハ其時ニヨルヘレ

第七十七章 初等留學生學資

初二年 九百ドルヲル

但止ムヲ得ヌ都下ニ滞在スヘキモノハ千ドルヲルヲ給スヘレ

後三年 千ドルヲル

但往返途中旅費ハ定限ノ外ナリ支度料ハ

上程前學資一ヶ月分ニ當ル高ヲ賜フ

第七十八章 上等留學生學資

千五百ドルヲルヲ千八百ドルヲル迄

但往返旅費支度料前章ニ同レ

第七十九章 私願留學生ハ官費ニ拘ラストイ

ハル學科上ニ於テハ官換留學生ニ准メハレ唯精密ノ検査ヲ受ケサルノミ

第八十章 留學私願ノモノハ其教師ヨリ見込ヲ詳記スルヲ第六十五章ノ如クシ之ヲ本省

出スヘシ本省ニ於テ其見込書ヲ以テ検査
シ可否スヘシ

但研業セシ所ノ學科規則ニ入ラサルモノ
ハ留學ノ名義ヲ免サス

第八十一章 私願留學ノ年限其人ノ望ミニ任
スヘシ

但一今年大概六七百ドル以上ヲ費ス
ニ非サルハ留學為シ難キヲ以テ其負數ヲ
出スル能ハサルモノハ之ヲ許サス

第八十二章 留學中居所轉換ハ官私共止ムヲ
得ル事故アルニ非サルハ容易ニ許サス必
公使ノ指揮ノ待ヘシ

第八十三章 留學中疾病事故等アルトキハ其
費證書ヲ以テ別ニ公使館ヨリ受取帰朝ノ
上一時ニ償還スヘシ若シ一時償還スルヲ能
ハサル者ハ第五十二章ニ定ムル所ノ償還使
役ノ年限ヲ増スヘシ
但私費留學ノ者ハ此地ニ於テ之ヲ本省ヘ
上納スヘシ

第八十四章 公費ノ生徒ハ上程ノ節學費一年
分ヲ渡シ翌年ヨリハ前半年分米國ハ前年九
月歐洲ハ前年七月後半半分米國ハ其年ノ三

月歐洲、其年、正月本省ヨリ公使館へ廻送
スヘシ私費ノモ、モ之ニ同シ故ニ私費、分
ハ前以テ本省ニ納ムヘシ

第八十五章 官撰留學生ハ歸朝ノ上必官ニ
奉職スヘカ又ハ官費ヲ償還スルカ共ニ命ニ
隨フヘキ、證書ヲ出ス、等第五十二章ニ同
シ

但奉職十一年償還十五年ヲ限トス

第八十六章 生徒留學中言行ヲ慎ミ學業ヲ勉

ニ國體ヲ汚リ、ハヤク日夜心ヲ用ユヘシ若
懶惰或ハ不行狀ニシテ前途ノ見込之ヲキモ
、ハ直ニ之ヲ呼戻スヘシ

第八十七章 其地ノ公使ニ於テ常ニ生徒ヲ
監視シ每年生徒ノ勤惰進退等明細表ヲ作
之ヲ本省ヘ送り即本省ニ於テ上梓公告スヘ
シ

第八十八章 時ニ因テ留學ノ定規ヲ變ムヘキ
件々ハ本省ト公使ト絶ヘテ往復商量シテ

之ヲ改ムヘシ

○學費ノ事

第八十九章 學事ニ關係スル官金ハ定額ニヨ
リ本省ニ於テ一切之ヲ管知スル
但教育ノ設ハ人々自ラ其身ヲ立ルノ基
ニテ以テ其費用ノ如キ悉ク政府ノ正租
仰クヘルヲリル論ヲ待タズ且廣ク天下
人々ヲシテ必ス學ニ就カシメシメテ期ス
レハ政府正租ノ悉ク給スル所ニダラス然

レモ方令ニアツテ人民ノ智ヲ開ク極メ
テ急務ノレハ一切ノ學事ヲ以テ悉ク民費
ニ委スルハ時勢未ク然ル可カラリルモノ
アリ是ニ因テ官力ヲ計リ之ヲ助ケサルヲ
得ヌトイヘモ官ノ助ケアルヲ以テ從來ノ
弊ニ依著ス可ラスニヨル
御布告

第九十章 凡人民ヲミテ學ニ就カシムル勉メ
テ廣習サルヲ欲ス故ニ官金ヲ以テ學事ヲ助
クルモノ、如キハ必民ノ及ハサルモノヲ助

クルニアリ決シテ偏重ノ事アルヘカラス
 士
 學ハレメテ農工商ノ學ハレメス或ハ富者ニ
 衣食ヲ給レテ學ハレメ貧ナル者學フコト得
 ス或ハ一人ニ數百金ヲ費ヤレテ學ハレメ衆
 人學フコト得サル類ノ如キコト有ルヘカラス
 第九十一章 生徒衣食ノ費用或ハ官金ヲ以テ
 之ニ給レテ當然トス是從來ノ弊ナリ公私
 學校ノ生徒衣食ノ用ヲ供スルコト一切之ヲ廢
 止スヘレ
 第九十二章 當今學事ヲ助クハ官金ヲ以テ
 スルモ左ノ目的ノ外ニ出ツヘカラス

一 外國教師ノ俸給并ニ外國人ニ係ル費用
 才藝ヲ進ムルハ外國教師ヲ假ラサルヲ得
 此際給ハ生徒辭レ得ルヲ助ク
 一 大學校ノ營繕及大學校ニ備フヘキ書籍器
 械學校營繕ノ如キハ完全ナル學業ヲ妨クハ
 甚多トモ止マシメ完全ナル生徒ノ學業ヲ妨
 少ニトモス究理化學其他百工技術必器
 ヲ以テ之ヲ教授ス此等ノ費生徒悉ク
 辨シ得ル能ハス仍テ官ヨリ之ヲ助ク
 一 中學校ニ於テモ前ニ同シ
 一 生徒ニ費用ヲ給貸スルノ費
 見合五十二章

及留學生公撰生ノ費用

一學區ヲ助メル費用

合ス

第九十八章 第九十九章
第百章ニ載スル所ヲ見

第九十三章 諸學校ニ於テ需メ所メ費用ノ條

件左ノ如シ

一教師ノ歲俸或ハ其居宅ノ屋賃

一學區取締給料

一學校僕役入費

一學校造營及修理ノ入費或ハ人家ヲ借テ學

校トスル時ハ其借賃

一學校諸器械教授器械或ハ修履

一學校ニ用ル薪炭油筆紙墨ノ費

一試業ノ入用

一體術器械ノ入用

此數件ノ全費ハ生徒之ヲ辦スヘキモノナリ
然レモ悉ク生徒ヨリ出サシムルトキハ生徒
ノ力及ハスモテ學業之カ為ニ滞穢スヘシ故
ニ官ヨリ之ヲ助クト雖モ生徒固ヨリ幾分ノ

受業料ヲ納メサル可ラス

第九十四章 大學校ニアリテハ生徒ノ受業料
一月七圓五十錢ヲ相當トス外ニ六圓四圓ノ
二等ヲ設ケ相當ノ受業料ヲ納ル能ハサルモ
ノ、為ニス中學校ニアリテハ一月五圓五十
錢ヲ相當トス外ニ三圓五十錢二圓ノ二等ヲ
設ケ小學校ニアリテハ一月五十錢ヲ相當ト
ス外ニ二十五錢ノ一等ヲ設ケ
但相當ノ受業料ヲ納ル能ハサルモノハ戸

長里正之ヲ證シ學區取締ヲ經テ其學校ニ
出シ許可ヲ受ケヘシ

第九十五章 一家二人ノ子弟ヲ學校ニ入ル者
ハ戸長若クハ里正ノ證ヲ待タスレテ其由ヲ
陳レ下等ノ受業料ヲ納ムスレ三人以上アル
時ハ二人ノ外受業料ヲ出スニ及ハス

第九十六章 諸學校ニ於テハ第九十四章定
所ノ受業料ヲ以テ便宜ヲ計リ其學校ヲ保護
スルニ要スヘシ然レモ生徒ノ多少ト學校

高下トニヨツテ其保護スルノ費過不足ヲ
生スヘシコレハ其校ノ情態ニ應レ少シク受
業料ヲ斟酌スルヲ妨ケナシトス

但大學校及外國教師アル中學校ニ於テハ
多分ノ不足ヲ生スルハ言ヲ待タス是官ノ
助力アル所以トイヘ凡各校ノ情態同ラサ
ルモノアルヲ以テ之ニ應シ亦少シク受業
料ヲ斟酌スルヲアルヘシ中小學校トイヘ
凡學區人民ノ貧富等ニヨツテハ少シク斟

酌スルニ妨ケナシ

第九十七章 定ル所ノ受業料ハ當令ニ依リテ
一概ニ行ハルリル事アラハ便宜ニ隨ヒ各區
ノ情態及學校ノ事情ニヨリテ暫ク下等ヨリ
少ク定ムルヲアルヘシ

第九十八章 凡學校ヲ設立シ及之ヲ保護スル
ノ費用ハ中學ハ中學區ニ於テ小學ハ小學
區ニ於テ其責ヲ受クルヲ法ニス故ニ官金ヲ
以テ之ヲ助クルモノハ學區ヲ助クルモノナ

リ區ノ情態ニヨリ人口ニ平均シ毎年出金セ
カ或ハ地方ニテ舊米ノ積金等學校ニ費バシ
テ妨々ナキヒノ積金ヲ以テ融道
ハ土地ノ事情ニ隨ハレ使宜

第十九章 教育ヲレテ普及ヲラメンカ為

ノ府縣ニ委託シ其學區ヲ助クルノ金額左ノ
如シ

人眞男女共一万人ニ付當分ノ内九十圓ニ付
九ノ割

金貳十九萬三千五百貳十七圓六十壹錢壹

厘三府六
十九縣

此金高ハ學校設立ノ基礎已ニ立テ之ヲ渡
スモノトス

此金額ハ明治六年一月ヨリ十二月迄、一
期トシテ之ヲ定ム一期以後、増減ハ其時
ノ議決ニヨルヘシ

此金ノ遣拂ハ毎年六個月毎ニ詳記レ本省
ヘ届クヘシ本省ニ於テ委シク上梓公告ム
ヘシ

第百章

前章定ムル所ノ金額ハ務テ民力ノ及ハサル所ヲ助クルヲ以テ目的トス是故ニ尋常容易ノ事ニ使用スヘカラス

但此金專ラ小學ヲ廣普レテ學則完整ナラシムルカ為ニ用テヘシタトヘハ小學校ヲ設立セシメン為學區積金ノ幾分ヲ助リ學區ニ托シ其使用ヲ為スル學區貧乏ニテ力足ラサル時其幾分ノ助クルヲ止ムヲ得サル情故アリテ小學教師ヲ官ヨリ遣ス時其

給俸ヲ助クルニ貧困ノ生徒受業料ヲ出スル能ハサルモノニ其幾分ヲ助クルヲ完全ノ學校ヲ設クル為メ其營繕等ノ用ヲ一時融通スルヲ器械書籍體術等ヲ備フル為メ一時融通スルヲ學區取締ノ給料幾分ヲ助クルヲ等

第百一章 額金ノ内五十分引キ別ニ之ヲ備ヘ置キ師範學校ニ於テ教授ヲ受ケレモ、後來小學ノ教師トナル時ニ其給料ヲ與フルノ助

クトスヘシ

但此俸給ハ學區ニ於テ辨スヘキモノトイ
ハモ現令ノ事情イマタ茲ニ至ラサルモ
アハラ以テ官暫ク之ヲ助ケサルヲ得ス

第百二章 當令外國教師アル學校ヲ保護スル
ノ費用ハ本省ヨリ直ニ之ヲ管理ス地方官其
情狀ヲ具シテ本省ニ達スハハ私ニ外國人
ノ入ルル學校
ヲ限ス

第百三章 將來大中學ヲ設ケ及之ヲ保護スル

ノ費用ハ前ニ同シ

但此教員アルヲ待テ追々設立スヘシ

第百四章 變則中小學費用ハ地方官ノ見込
ヨリ之ヲ處分スヘシ

但其實事ヲ具シ本省ニ届クヘシ

第百五章 凡大中小學校ノ營繕ハ公費其務ハ
完全ヲハス期ス若目前ノ速成ヲ欲シテ事姑
息ニ涉ラハ到底得ル所ナカルハ是故ニ其力
ヲ計リ今年具一ヲナシ明年其二ヲナシ順次

進步數年ヲ期シテ全國ノ完整ニ至ルヲ要ス
但生徒學業ノ事ヨリテハ一日ヒ忽ニス
ヘカラストイヘル廣ク全局ヲ見テ宜ク本
末順序ヲ誤ルヘカラス

第百六章 本省定額金ノ遣拂ハ毎年七月中明
細ニ記シ上梓公告スヘシ

第百七章 諸學校ニ於テ毎年費スル金額ハ
學校ノ實情ニヨリテ之ヲ定ム、其公私共
遣拂ノ第幾式ノ如ク明細表ヲ製シ毎年ニ

月七月督學局ニ出スヘシ

第百八章 器械書籍ハ學校必要ノモノトスル
ヲ用ヒテ完備セシメスルハアル可ラス諸學
校所在ノ書器ハ第三號式ノ如ク表ニ製シ每
年二月中督學局ニ出スヘシ

第百九章 凡諸學校ノ設立スル必ス維持保護
ノ目的ヲ要ス即第四號式ノ如ク表ニ製シ每
年二月中督學局ニ出スヘシ

文部省

就學男女教

第何大學區內
何縣

[illegible]

仁龍其ノモ、ハ私學ト書スレ
官ノ扶助金下ルモ、ハ私費ト書スレ
ノ過クハ公學ト書スレ

百七章第二號表式
但用紙美濃紙ノ事

第幾大學區何縣管內

何郡何村第幾番中學
第幾中學區何郡何村第幾番小學

明治何年千支出納表

納之部	生徒受業料	生徒學費金	習籍拂下	誰寄付金 利子	區內 集金
出之部	教師給料	教官給料	通辯給料	教授人給料	事務管給料
				官員よりバミテ教授人ヲ相雇ふ	

[illegible]

									官 扶助金	小吏門監給料
									某ノ積金	役夫給料
										教師張費
										營繕入費
										書籍入費
										器械入費
										諸雜費
										生徒贈入費
									總計	總計
									餘金	不足
										千支何月何日調算

千丈何月何日調筭

竹制、白八章、第三號表式
但用紙、美濃紙、事

修繕		現場調高		壬申 何月改		公學 第幾大學區何縣管內 何郡何村第幾番中學 第幾中學區何郡何村第幾番小學	
				書籍名		冊數	
				器械名		頁數	
				書籍名		新購	
代金		代金		代金		代金	

月 日 何		英	佛	獨	蘭	何	總計
生徒拜借		何々 何冊					何部何冊
拜借返納		同上 同上					同上
州 下		同上					何部何冊
諸向出納							出何部何冊 納何部何冊

第幾大學區內何縣管內
第幾中學區第幾番小學

代金
何部何冊